

大磯地区に於ける本土決戦期の遺構調査Ⅲ
市原 誠
(戦時中の大磯に関する調査市民協力者)

1. はじめに

第2次世界大戦末期における相模湾の対上陸防御に関する3回目の調査報告書となるが、昨年度に続き神奈川県中郡大磯町西小磯地区に掘削された本土決戦期の壕を中心に論じていきたい。

本稿では、調査が終了した西小磯5号壕～7号壕の3ヶ所のほか西小磯対戦車壕と王城山穹窿式加農砲陣地の考察を掲載していくものとする。壕の名称は、昨年度に続き単に調査した順番で地名に番号を付けて記録した。

今年度の調査期間についてであるが、2020年(令和2年)11月28日、12月12日、2021年1月16日、2月20日、3月6日、3月10日、4月3日の計7日間となっている。本来ならば、冬の真っ只中は積極的な調査シーズン到来であるが、昨年に引き続き今年度も新型コロナウイルス感染拡大に苛まれて中止や規模の縮小を余儀なくされてしまった。そのため、調査日数と比べて実測の成果が少なくなっている。

だが調査を進めていく過程で、付近に西小磯対戦車壕の存在が明らかになったり、王城山穹窿式加農砲陣地について判ってきたりしたことも多い。これらについては、実測の成果も去ることながら相模湾の対上陸防御を語る上では評価に値する事実の判明だ。

2. 西小磯5～7号壕の構築部隊と構築目的は？

故清水孝氏⁽¹⁾によると、終戦頃に千畳敷山(湘南平)付近一帯は、歩兵第402聯隊⁽²⁾主力の第3大隊が布陣していたという。この証言から判断して西小磯5～7号壕については、同隊構築と考えて良いだろう。

その構築目的については、3ヶ所の壕は平塚市万田方面へ抜ける街道(町道)沿いの東西両側に存在している。これは上陸した米軍が北に向かって侵攻するのを阻止する目的を帯びていることは明白だ。北進する米軍を斜め後方より狙い撃ちできる構造になっているようだ。いずれの壕も竣工しているとはいえない状態で放棄されており、判らないことも多いが、何らかの火力を伴って打撃力を有する兵器の準備を想定していたことは確実視する。もしかしたら、斬り込み隊の陣地としての使用も考えていた可能性もある。

掲載する3ヶ所の壕近辺には対戦車壕が準備されていたことが明らかとなったが、そこで北に向かって侵攻する米軍に渋滞を発生させたところを叩く心算だったのだろう。さらに北方には、高い打撃力を伴う東京湾要塞第2砲兵隊⁽³⁾の千畳敷山28cm榴弾砲陣地が存在している。この榴弾砲陣地を守る役割も

あったのかも知れない。

3. 西小磯対戦車壕

勤労奉仕をした中村晴夫氏(取材時：89歳)によると、大磯町西小磯1286-7番地付近の土手から川に向かって対戦車壕を掘ったとの話である。現在は、何の痕跡もない。

対戦車壕のイメージとしては、古代から近代に亘って建設された城には外敵の侵入を防ぐ堀を伴っているが、その堀を対戦車壕に置き換えると、理解しやすいだろう。戦車を格納する壕ではない。

米軍の侵攻が想定された場所には、多数の対戦車壕が掘られていたと考えられるが、西小磯地区でその場所を特定できたのは、ここだけであった。

4. 王城山穹窿式加農砲陣地

王城山に登る道は、トラックが通行できて海軍道路と呼ばれた。現在では、海軍道路という名称を知る者に会うことは非常に稀なことである。海軍道路の工事は、1942年(昭和17年)あるいは前年と思われ元々は千畳敷山防空砲台に関連する付属施設建設のためだった。

高橋誠一郎氏⁽⁴⁾の日記によると、1943年10月には、王城山山頂の平地に何らかの軍事施設が存在していたことが確認できる。その軍事施設とは、推測域だが探照灯であろう。このころの王城山は横須賀鎮守府が入山規制を敷いていたようだ。

だがその1年半後には、本土防衛の名の下、海軍道路を最大限活用し王城山山腹に、今度は陸軍を主体とした穹窿式加農砲陣地の構築が始まるのだった。陣地構築開始時期については、1945年5月ころから小田原に司令部を置く砲兵情報第5聯隊⁽⁵⁾が担任した。備砲については、海軍砲で間違いはないのだが、「大東亜戦争 相模湾火力配置図其の二」によると12cm加農砲が配備されたことになっているが、当時、王城山で勤労奉仕をした片野一雄氏⁽⁶⁾(取材時：87歳)によると戦艦長門から降ろした14cm加農砲だと話す。警防団がそう話していたのだという。

しかし、現在は穹窿式加農砲陣地が存在した痕跡や史料なども皆無に等しく、僅か76年前の出来事なのにそれが事実か否かも判断できなかった。唯一、『大磯の民俗(二)』に、僅かながら王城山へ通じる海軍道路と砲台の存在を示唆する文面が確認できた。

ところが、終戦直後に米軍が王城山を撮影した航空写真解析と、当時、布陣していた兵士の証言、前出の片野一雄氏の証言から、洞窟式砲座と軌道を伴う移動式の砲台が存在したことが判ってきた。

後述の考察を参照していただきたいが、王城山穹窿式加農砲陣地についての詳細を具体的に論じるのは、本稿が初めてとなるだろう。

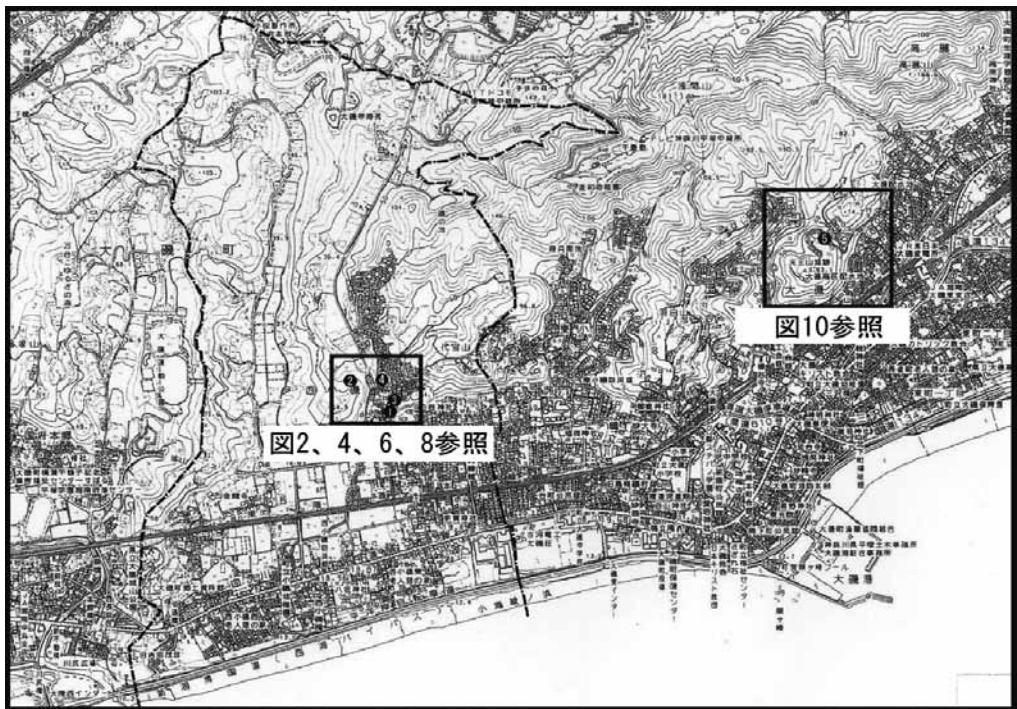


図1 位置確認マップ

①～③は、西小磯5号壕、6号壕、7号壕、④は西小磯対戦車壕、⑤は王城山穹窿式加農砲陣地の場所を表す。

①西小磯5号壕

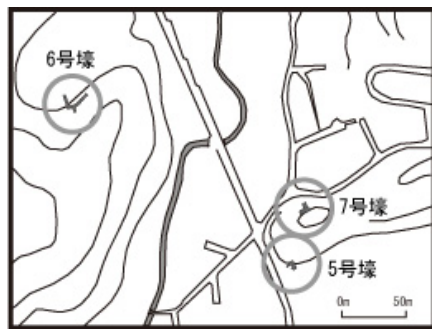


図2 西小磯5号壕位置

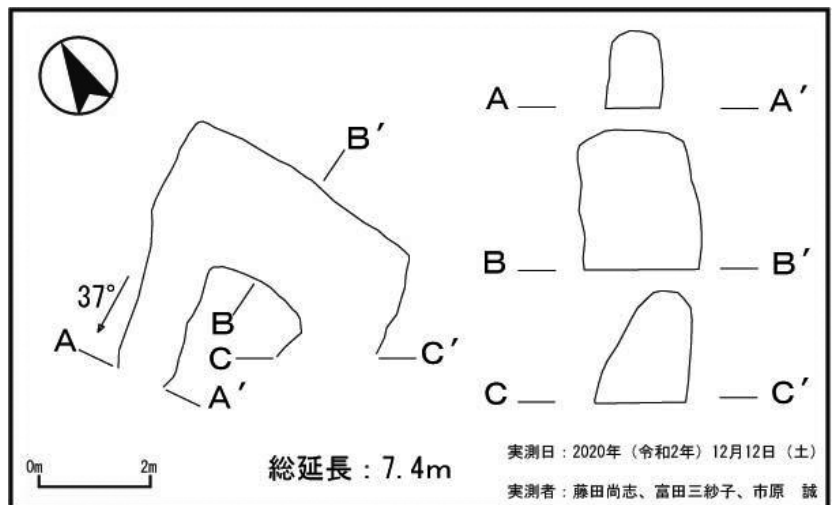


図3 西小磯5号壕実測図



写真1 西小磯5号壕西側入口



写真2 西小磯5号壕東側入口

2020年（令和2年）12月12日撮影

家主によると兵隊が掘削したと聞いているという。西側入口は、20年くらい前に崩落したといい狭くなっている。現在は、物置として活用しているが対弾層（岩盤）が薄いためか大雨だと雨漏りするとの話である。本壕西側入口のほんの少し西側には、構築を始めたばかりで放棄された坑道とは呼べない掘削痕跡あり。

本壕は、歩兵第402聯隊第3大隊で構築したと推定するが、この規模だと少人数で比較的短時間のうちに掘削できたであろう。強いて構築時期を推定するならば、1945年（昭和20年）8月ころから掘削して、終戦によって頓挫したのだろう。後述の西小磯7号壕とは、連結を予定していたのではないだろうか。

②西小磯6号壕

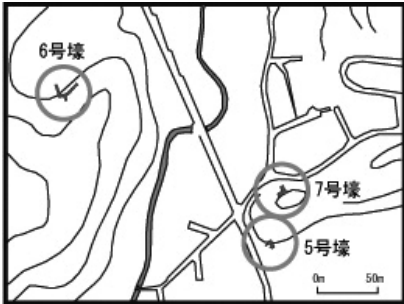


図4 西小磯6号壕位置

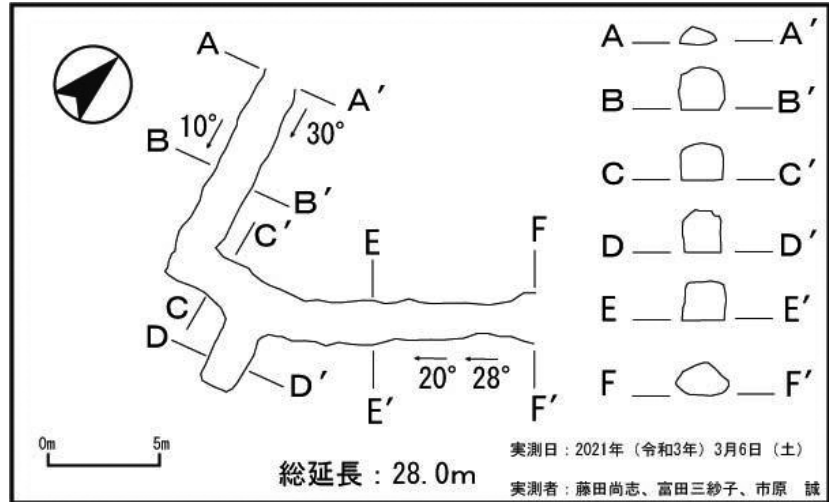


図5 西小磯6号壕実測図



写真3 西小磯6号壕北側入口



写真4 実測図E付近より東側を望む



写真5 西小磯6号壕東側入口

2021年（令和3年）3月6日撮影

本壕より東方約80m付近には、街道が通っており、来寇する米軍に対処することを想定していたのは間違いのない事実であろう。付近には対戦車壕の存在も確認でき、相模湾から上陸し南方からの侵攻が想定される米軍に対し斜め後方から対応できる場所に存在している。かつ、海側からは、その位置が特定できない巧妙な場所に掘削されており、戦術上、非常に理屈に合っている作りといえる。本壕のような布陣は、本土防衛の最前線各地で観察できる。

本壕は、完成状態とはいい難く用途については判らない。強いて推測するならば、地下通路の幅が広めに掘削されているため、比較的小型の火力を伴う兵器を準備し、坑道内部での移動も考慮していたのだろう。

③西小磯 7号壕

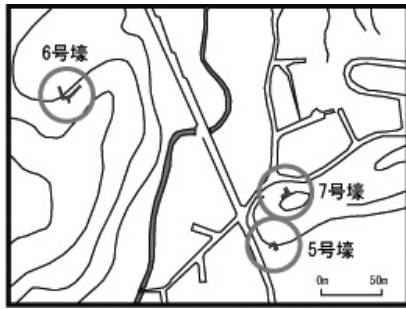


図6 西小磯 7号壕位置

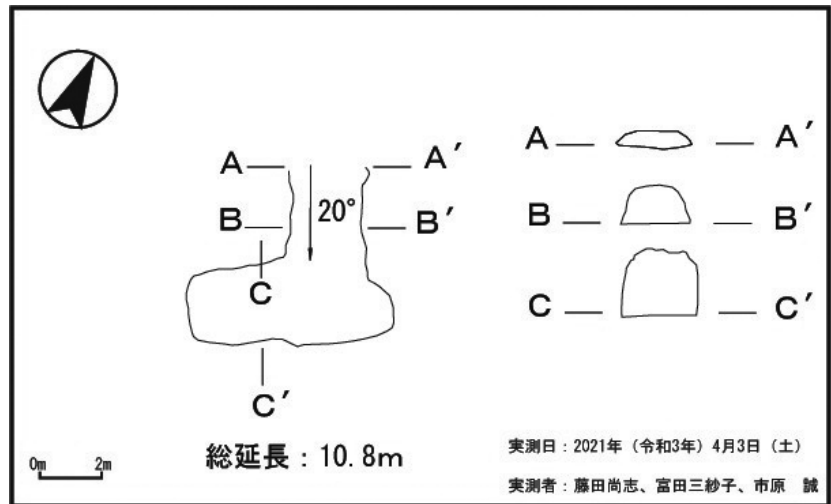


図7 西小磯 7号壕実測図



写真6 西小磯 7号壕入口



写真7 西小磯 7号壕実測図C付近

2021年(令和3年)4月3日撮影

本壕が存在した小高い丘は、網の目のように地下通路で連結し、丘全体を要塞化しようとしたのだろう。西小磯 5号壕とは連結することを想定していたと考えられる。

本壕の構築目的は、推測の域を出ないが西方約 50m に位置する街道に沿って侵攻する米軍に対処することと考えられる。いずれにしても、この方面の本土決戦準備は、正味 4 ヶ月程度しかなかったため、わずか 76 年前の出来事でありながら歴史の間に消え去り構築意図が不鮮明な箇所が多い。本壕の掘削期間は、作業人員数にもよるだろうが数日程度だったと思われる。

④西小磯対戦車壕

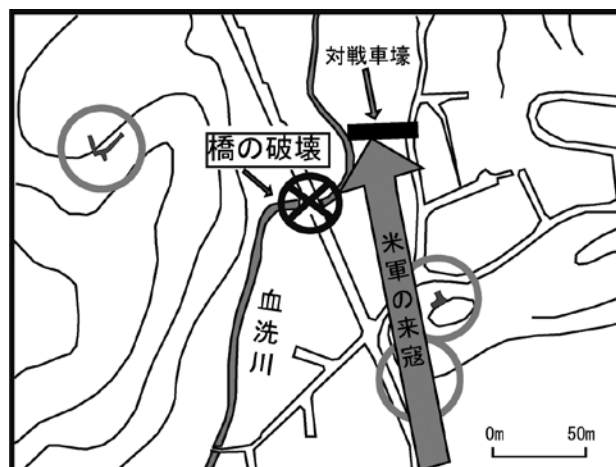


図8 西小磯対戦車壕活用のイメージ図

現平塚市万田に通じる街道は、侵攻を企てる米軍にとっては重要な要衝となったに違いない。対して迎え撃つ日本軍にとっても起伏のある地形のため、防御に適した要衝だった。この地より北約 1,000m 付近には、終戦ごろに、周辺地域で群を抜いて高い打撃力を備え持つ東京湾要塞第 2 砲兵隊所属の千疊敷山 28cm 榴弾砲陣地が稼働状態に近付いていた。このような条件が重なる地は、大激戦地になり得る。

血洗川に架かる橋は、米軍の来寇が近付いた時点で日本軍が破壊。血洗川が天然の防壁となり、米軍は渡河が不可能となる。やむなく米軍は、東寄りに進路を変え北侵を試みる。しかし、そこには日本軍が構築した対戦車壕が存在し、米軍は立往生を余儀なくされる。街道東西にある小高い丘に構築された日本軍陣地より、立往生した米軍に対し斜後方から側射、あるいは斬り込みがかけられ殲滅を企図し侵攻を阻止。損害を被った米軍は増援を送り込み消耗戦へと展開していく。この繰り返しが激戦へと発展していく構図である。

⑤ 王城山穹窿式加農砲陣地

王城山には、B12K の記載が見受けられる。B12K の「B」は海軍砲を表し、「K」は加農砲を表す。備砲については 12cm 加農砲となっているが、実際は横須賀に係留されていた戦艦長門から陸揚げした 14cm 副砲である可能性が高い。

なお、王城山の北東方向へと続く水道山の尾根付近の高所にも加農砲を備えた記載が認められる。ただし現在のところ、その痕跡や証言ともに有力な情報はない。現地へ出向いてみると射撃ポイントとしては、弾巢になるか否かは別として相模湾を一望でき絶好な場所といえる。

さらに北東方向に位置する尾根の高所である高麗山には、B14K の記載あり。高松宮日記の 1944 年（昭和 19 年）11 月 3 日付で「教材 14cm、12、7 を高麗山に移すを第 2 案とす。」との記載を見付ける。現地へ出向いてみると、それらしき「コの字型」で総延長 20m を少し超える程度の坑道だけが存在する。

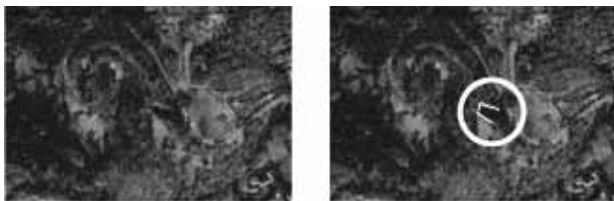


写真 8 1946 年（昭和 21 年）米軍撮影
～王城山の航空写真①～

写真右の○印のところは掩砲所へと通じる掘込み（切通し）と推測。写真左と対比していただきたい。撮影時間は、影から推測すると朝と思われる。



写真 9 1946 年（昭和 21 年）米軍撮影
～王城山の航空写真②～

○印の所には、明らかに掘込み（切通し）が確認できる。影のつき方から陽の高い時間帯の撮影と推測。

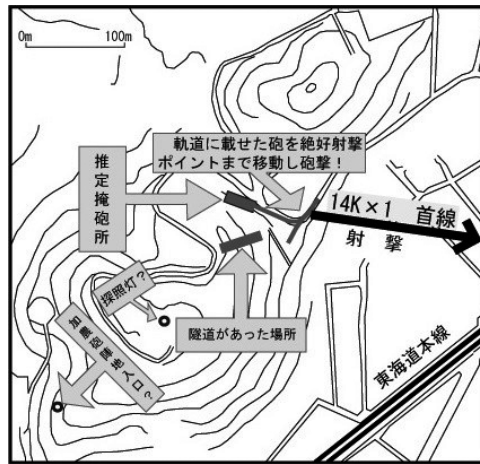


図 10 王城山穹窿式加農砲陣地 見取り図
推定により作図（隧道位置は畠山順次氏による）

前出の「相模湾火力配置図其の二」や当時、布陣していた砲兵情報第 5 聯隊所属兵士の証言から王城山穹窿式加農砲陣地は、今まで終戦ごろには何らかの形で存在していたと思われる。だが、その痕跡が乏しかったため、実態が不明のままであった。構築は、1945 年（昭和 20 年）5 月以降で間違いない。

しかし、勤労奉仕を経験した片野一雄氏の証言によると、その構造は、普段は加農砲を坑道内に格納し、有事の際は敷かれた軌道の上を好ポイントまで移動して射撃するものだったという。現地に赴いてみると、砲の移動は人力に頼らざるを得ないため軌道を敷くことができたのは起伏の少ない僅かなエリアだったと思われる。軌道の距離は、100m にも満たなかったと推測できる。当時、その構造が東海道本線からは良く見えたといい、客車の車窓には鎧戸を閉め規制がかかったという。ちなみに備砲は、先述したとおり、警防団が戦艦長門から外した副砲だと話していたと片野氏はいう。そして、山頂の探照灯は千畳敷山防空砲台と連動していたことだろう。

現在は掩砲所の痕跡が見当たらないが、造成によって消滅したためであろう。唯一、その痕跡らしき遺構が標高の同レベル上である王城山南西中腹に認められる。その構造は、羽白山（坂田山）穹窿式加農砲陣地と酷似している。もしかしら、王城山は地下通路で貫通しているのかも知れない。

ちなみに大磯丘陵に詳しい畠山順次氏によると、1980 年（昭和 55 年）ころまで隧道があったとのことだが、王城山に加農砲陣地が存在したことは聞いたことはなかったという。

現地踏査については、2021 年（令和 3 年）2 月 20 日に藤野敬子氏、3 月 10 日に鈴木一男氏、4 月 3 日に藤田尚志氏、富田三紗子氏を伴い計 3 日間実施した。

主要参考文献

- ・大磯町『大磯町史民俗調査報告書五 大磯の民俗（二）』1998 年
- ・市原誠（『近代戦跡考古学 22（軍装操典 101 号）』2010 年）
- ・高橋誠一郎（『新編 虎が雨（慶應義塾大学出版会株式会社）』2011 年）
- ・市原誠（『平塚市博物館研究報告 自然と文化 34 号』2011 年）
- ・市原誠（『近代戦跡考古学 55（軍装操典 144 号）』2021 年）

注

(1) 1925 年（大正 14 年）7 月 4 日生。陸士 58 期。陸軍少尉。終戦時は、大磯海岸布陣。2012 年（平成 24 年）3 月 6 日逝去。享年 86 歳。筆者がもっとも、ご教示を頂いた方の 1 人である。生前の氏の強い

意向で、筆者に散骨するよういわれており、その遺言を受け入れた。

(2) 1945 年（昭和 20 年）5 月 2 日に甲府で編成された。

(3) 1945 年（昭和 20 年）4 月 15 日、第 53 軍隷下となる。隊本部は、大磯にあった。

(4) 1884 年（明治 17 年）生。文部大臣。1982 年（昭和 57 年）2 月 9 日逝去。

(5) 1940 年（昭和 15 年）7 月 15 日に習志野で編成。満洲に布陣していたが、1945 年（昭和 20 年）3 月内地転属発令。第 53 軍に編入され、相模湾正面の対上陸作戦準備に入る。同年 6 月、軍砲兵隊（第 11 砲兵司令部）に編入され、引き続き作戦準備中に終戦となった。

(6) 1931 年（昭和 6 年）8 月 20 日生。1998 年（平成 10 年）～2002 年（平成 14 年）まで大磯町長を務めた。